

佐賀県研究成果情報（作成 2021 年 2 月）

[情報名] タマネギべと病薬剤防除体系に組入れ可能な新規有効薬剤

[要約] タマネギべと病に対し、定植前にジャストフィットフロアブル、定植 2 週間後にオロンディスウルトラ SC を散布する防除体系は、一次伝染抑制効果が高い。暖冬年に二次伝染期が早まる場合には、ピシロックフロアブルを追加で予防散布することで、二次伝染を抑制できる。

[キーワード] タマネギ、べと病、薬剤防除、一次伝染、二次伝染

[担当] 佐賀県農業試験研究センター・環境農業部・病害虫・有機農業研究担当

[連絡先] 0952-45-8808・nougyoushikensenta@pref.saga.lg.jp

[分類] 普及

[部会名] 野菜

[専門] 病害虫

[背景・ねらい]

タマネギべと病は、3 月～5 月に発生盛期となり、多雨が続くと多発すると、生育が著しく抑制される。本病の対策として、伝染源となる一次伝染株（越年罹病株）の発生を低く抑えることが重要であるため、より高い防除効果が得られる防除方法を確立する。

また、近年、暖冬傾向が続いていることから、二次伝染の感染が早まると予想された場合の対応として、新規薬剤による防除効果を明らかにする。

[成果の内容]

- 1 . タマネギべと病の一次伝染に対して、定植前にジャストフィットフロアブルを散布し、定植 2 週間後にオロンディスウルトラ SC を散布することで、発生を少なく抑えることができる（表 1）
- 2 . 通常は 2 月下旬から二次感染防止のための防除を行うが、気象条件や生育状況から、二次伝染開始が早まると予想される場合、ピシロックフロアブルを予防的に散布することで、初期の二次伝染を抑制できる（表 2）。

[成果の活用面・留意点]

- 1 . 苗床はバスアミド微粒剤による土壌消毒を行い、べと病菌の汚染のない健全な苗を定植する。
- 2 . 圃場内にわずかでも一次伝染株が発生すると、それが伝染源となり、その後のべと病の多発生を招く恐れがあるため、防除効果を安定させるためには、薬剤防除と併せて、一次伝染株の抜き取りを実施する。

[具体的なデータ]

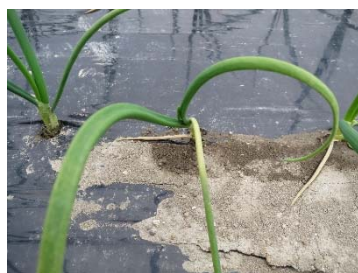


写真1 タマネギベと病の一次伝染株

表1 タマネギベと病の一次伝染による発病抑制を目的とした
薬剤散布時期及び散布回数の違いが防除効果に及ぼす影響^{注1)}

No.	処理時期			調査 株数	累積発病 株数	累積発病 株率(%)
	定植直前 (11/14)	定植7日後 (11/21)	定植15日後 (11/29)			
1	JF	—	OR	240	0	0.0
2	JF	OR	OR	240	0	0.0
対照 (慣行)	JF	—	A剤	240	5	2.1
無処理	—	—	—	240	10	4.2

注1) 品種：七宝早生7号 定植：2019年11月14日 1区3㎡ 80株×3反復
累積発病株数は2020年1月6日から3月23日まで約7日間隔で調査した発病株の合計値
JF：ジャストフィットフロアブル 3,000倍、
OR：オロンディスウルトラSC 2,000倍

表2 タマネギベと病の二次伝染に対する薬剤の散布タイミングによる防除効果^{注1)}

	薬剤散布日		調査 株数	調査日				
	2月11日	2月21日		3月9日		3月17日		防除価
				発病株率	発病度	発病株率	発病度	
1	ピシロック	ピシロック	150	2.0	0.5	6.7	1.7	80.4
2	フロンサイド	ジマンダイセン	150	4.7	1.3	16.7	4.2	51.0
無散布	—	—	150	24.7	8.5	35.3	10.3	

注1) 品種：七宝早生7号 定植：2019年11月14日 1区3㎡ 50株×3反復調査
ピシロック：ピシロックフロアブル 1,000倍、フロンサイド：フロンサイドSC 1,000倍、
ジマンダイセン：ジマンダイセン水和剤 500倍
2月13～15日に感染好適条件が出現した。

[その他]

研究課題名：タマネギベと病緊急特別対策事業

予算区分：県単

研究期間：2019～2021年度

研究担当者：古田明子、井手洋一

発表論文等：古田・井手（2021）日本植物病理学会報:87巻1号（講要、印刷中）